

沖

6
2016

俳句雑誌【おき】



御柱祭

能村 研三

宗左近没後十年

永遠より長い瞬間夜の虹

宗 左近

のどかなり常着のままの遠吟歩

果敢なる咲きざま倣ふ藍微塵

鯉糶る気負ひ任せの捨値かな

鬼あられ纏ふ鉄瓶夏炉焚く

この六月で詩人の宗左近さんが亡くなって十年になる。宗左近さんの詩碑が市川市の里見公園の江戸川が望める丘の上に建つことになった。市川に住む宗左近さんに「沖」で始めて原稿依頼したのは、昭和六十年の「沖」創刊十五周年の記念号。諸家寄稿の中で「蕪村寸見」という文章をご執筆いただいた。その中で宗さんは、「この十数年来、先達の和歌と俳句には次第に親しんできています。場合によっては現代詩を読むよりはるかに、物の受けとりかたについて教わるころが多い。つまり楽しい。」と書かれている。

さらに十年後平成七年の「沖」創刊二十五周年の記念大会では「沖の沖」と題した記念講演を行っていた。その頃は宗左近さんがさらに俳句に傾倒した時代で、この後宗さんの提唱で「中新田俳句賞」が制

諏訪大社御柱祭

出惜しみの木遣掛け合ひ御柱祭

川越しへ樹皮地ごすりの御柱

御柱祭曳き子揃ひのおんべ振り

風光る目処挺子乗りの冥利かな

華乗りに命あづけて御柱祭

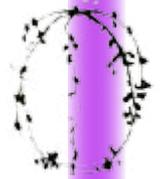
御柱祭お宿炭屋のおもてなし

定されるなどの俳句の世界でも宗さんの存在が大きな影響力をもった。私は平成十一年、市の仕事で開催した「第一回市川の文化人展」において「宗左近展」を担当したことも忘れられない思い出である。それ以来、宗さんとの公私共々の親密なお付き合いが始まった。宗さんの提唱で始まった「市川市民文化賞」の第一回の受賞者に能村登四郎を選んでいただいたのをはじめ、市川をこよなく愛され市民主体による文化振興の推進に、先頭を切って関わって下さった。

この後、「夜の虹賞」を制定し目らが選んだ方に賞を贈り、宗さんがお持ちの貴重な古美術品を副賞として授与された。この賞の名になった「夜の虹」は、句集の題名にもなっている。夜の闇の中でも輝いてみえる虹のように、日の当たらない所でコツコツよい仕事をしている人に光を照らしたいというのが宗左近さんの考えであった。

掲出句には、「永遠より長い瞬間」とある。間もなく市川の国府台の江戸川を望む河畔に「透明の蕊の蕊」の詩碑が建立されるが、その詩の中でも「幸福より長い永遠」「瞬間より深い宇宙」と詠っている。

蒼茫集



はくれん

吉田政江

甘味処へ針納めらし二三人
豆腐屋を呼び戻す声春一番
春の闇MRIの鉦の中
朧夜の玉子スープの透けにけり
花冷やごろんと外す足ギプス
はくれんの拳びらきや回復期

秒針

安居正浩

脳内に秒針響く大試験
囀や卓に広げる建築図
蛤の二つをさまるお吸物
陽炎へ直進といふ選択肢

永久齒とは名ばかりや山笑ふ
郵便受け律儀に並ぶ春夕べ

さくら咲く

菅谷たけし

はくれんの百花一音なくひらく
芝青むりハビリに知る屈み方
桜あふるる分校前の道路鏡
鶯やベンチに憩ふ患者どち
東金線は三駅のみ
さくら咲く求名・東金・福俵
折畳み杖はたたんで青き踏む

無職

森岡正作

花吹雪荒ぶる魂の御社へ
花万朶髭濃き男集ひをり

ためらはず無職と書けり花は葉に
働けと言はむばかりに揚雲雀
耕せり土の温もり土の黙
黒潮の潮目はるかに春逝けり

五月へ 千田百里

府中吟行二句
芽吹きたる櫛並木の武蔵ぶり
義家の視線に陸奥や芽吹き急
俳書とは語彙の森林囀れり
花万朶寺井の蓋に猫眠り
行く春の鳶や高みに輪を絞り
靴紐を替へて五月へ歩き出す

狛 犬 宮内とし子

原節子若きに生きてかぎろへり
八重桜ベンチの赤子乳を欲り
山笑ふ手毬置かるる五合庵
高麗神社三句
桜東風櫛並木は神の道

義家公くつろぎ給へ桜満つ
狛犬の相寄ることもなき日永

津 軽 小野寿子

日脚のぶこころのなかにまた心
この奥は世界遺産や五月闇
何詠まむ休耕田の猫柳
指さして村びと迎ふ初燕
山ざくら雲はたちまち峠まで
下萌えて津軽やうやく見えてきし

散り際 小松誠一

遊ぶ児の全身映す忘れ潮
声明の違ふ息継ぎ彼岸寺
老櫛芽吹き街中栄やすかに
散り際をじつと眺むる桜守
武蔵野の序幕フィナーレ花吹雪
行く春や余白の増えし日記帳

常につめたき

林 昭太郎

両腕を持たぬヴィーナス鳥帰る
永き日や川は堤に導かれ
鳥雲に乳酸菌は胃に腸に
弁当の箸春光を二つ割
蒸しパンの蒸籠を出づる花曇
葉桜や常につめたき膝頭

御 柱 宮坂恒子

透きとほる眼をもちて新教師
炉辺の縁さすりて春を惜しみけり
瞬けるさみどりの星四月くる
卒業子背に別れの言葉あり
身を叱り叱りて春の風邪ぬかす
背すぢ立て生きむ次なる御柱へ

大地震 藤原照子

八橋をつくろふ木の香菖蒲の芽

曲水の宴や旅程になき出合ひ
花人の退きし寺領や月天心
夜桜を隔つしじまや子規球場
永らへて銀座の足袋屋春ともし
列島に大地震頻り菊根分

声を張る 田所節子

点滴を引きゆく遅日のロビーかな
母の眼へ傘高く上げ合格す
ゆつたりと睡魔待ちぬる春の闇
雨あがるあがる鶯声を張る
明日信じ花の種蒔く母白寿
梨棚の花に日ざしの撥ねてをり

大列柱 久染康子

芽吹き待つ檜は黒き大列柱
花万朶府中の杜の浮上せり

花疲れてふ贅沢をしてゐたり
青葉若葉の木洩れ日燥ぐ大參道
牡丹咲く雨滴に紅を滲ませて
春潮のぶ厚きうねり外房線

含み潮 樋口英子

蛤の炭火にこぼす含み潮
ぶらんこを蹴つてしばらく若返る
揚ひばり高天原の高さまで
白鳥の帰りし空の青さかな
子の名のみ大きく見えて合格す
春寒のどこかに空気清浄器

武蔵ぶり 成宮紀代子

養花天水抜き柄杓の武蔵ぶり
かなぶつさまと見紛ふ樹相花万朶
花散らしの雨紅鼠ねずに地を染めて
一輪草にかがみて友の傘に触る

菜の花を厠の神に奉る
緑雨晴芽吹き稲荷の鈴澄みて

熊野水軍 広渡敬雄

雛流す熊野水軍統べし海
春筍の山行くごとし耳順過ぐ
夕暮れの色となりゆく春の鴨
更地とはおほかた矩形鳥帰る
遠ざかるほど蒲公英のあふれけり
放蕩の男に惹かれ春の月

青春第二章 杉本光祥

優先席ゆづりゆづられあたたかし
新茶摘む一摘み三葉とふ手つき
シギリアの岩壁掠め初燕
芽吹き急武蔵国府の大櫓
風眩しデッキブラシで象洗ひ
花は葉に我は青春第二章

潮鳴集



沸点 内山花葉

武蔵野の沸点桜ふぶきかな
櫻は父さくらは母よ国府の地
古井戸の滑車きゆるつと緑立つ
復興の土盛り上げて菜種梅雨
這ひ出でし飯蛸へとぶ糶値かな

櫻並木 能美昌二郎

鷹鳩と化して櫻の大列柱
老兵と気付かず生きて臍かな
啓蟄やマトリョーシカの子沢山
鳥帰る羽音はやがて風音に
竜天に登る櫻は雨を呼ぶ

市民の森 井原美鳥

生くる地と決めし直根たんぽぽ黄
檀寺に寸の用ある初音かな
桜蔭降るや病院坂の雨
閉校式了へたる校舎つばめ来る
巢立鳥市民の森がうしろだて

水陸両用車 齊藤實

逃水へ上がる水陸両用車
春を引き込む野火止の用水路
春潮の香り持ち来て市が立つ
たんぽぽを葉にしたる日を思ふ
春の月助詞のごとくに星ひとつ

ビバルディー

篠藤千佳子

ビバルディー流す一日水温む
聞き役の微笑んでゐる春炬燵
春泥を跳ね上げてゆくランドセル
一塁へ全力疾走山笑ふ
春愁の動き出したるローカル線

遠近法

峰崎成規

砂吐いて浅瀬は海の記憶消す
峡深し日向日陰に春の時差
あたたかし欠伸連鎖の午後の句座
逃水が逃げ先惑ふ環状路
芽吹き待つ檉千樹の遠近法

砂糖

町山公孝

コーヒーに砂糖は入れず入学す
楽の字を書き鬱の字は書かず春
スニーカーおろしたてなる日永かな
大げやき町を貫く芽吹きかな
武蔵野にさくら咲くさく桜咲く

炎のやうに

七種年男

観梅や順路は風の通り道
桜鯛炎のやうに釣られけり
闘牛の角の先端風尖る
飛び代は雲の高さよ揚ひばり
鉄棒に子の手のぬくみ春の暮

花の稜線

清水佑実子

叡知とも養生檉芽吹きけり
来し方の起点にいつも桜かな
積みあぐる花の稜線峡の空
花吹雪方向感覚狂ひけり
千年の大樹を仰ぎ春惜しむ

鋭き眼

佐々木よし子

石垣に枝垂れて盛ん迎春花
楓の芽赤き雫をこぼしけり
初蝶来新車の届く朝かな
泊船に早や灯のともり菜種梅雨
つちふるや眼鏡き烏骨鶏

沖作品



能村研三選

三月の電車網棚に花束

窓際の遅きランチや花曇

水上バス離る春の灯こぼしつ

しだれ桜の揺るるは枝の命なり

初蝶を袋小路に見失ふ

春灯文旦飴の噛み応へ

不揃ひは自由の証し土筆摘む

ほろ苦きものへ箸ゆく遍路宿

花冷や白紙で届くフアクシミリ

春愁ビジネスホテルの開かぬ窓

さくらさくら木橋に変はる石の橋

花辛夷健気な嘘をつき通す

芝焼くや課外授業の火打ち石

冴返る手に火起こしの風囲ひ

巣鴉や身の丈ほどの枝運び

市川市

小川 流子

千葉

坂本 徹

福岡

吉武 美子

風光る羽ペンで描く帆掛け船

琵琶の碑の弦からまりてもどり寒

曳く水脈のVやWや春の鴨

白湯のごと沁みるひと言あたたかし

若柳ロックンロールの風に揺れ

三寒四温マトリョーシカの木のぬくみ

にぎはひの中の孤独や名残り雪

鳥帰る眼に海光の痛きほど

岬端に置む白波花曇

湯船てふひとりの船や春駝蕩

逃水の行き所なき曲り角

花種を風よけながら蒔きにけり

野火の炎の舌の韋駄天走りかな

校名のにはかに高し卒業歌

永き日の立ち寄る路上ライブかな

市川市

小林 陽子

長崎

田川美根子

千葉

塩野谷慎吾

沖作品 15句選評

*
能村研三

しだれ桜の揺るるは枝の命なり 小川 流子

しだれ桜とは、枝が柳のように垂れ下がっている桜で、染井吉野より一週間ほど早く咲き、ピンクや赤、白の花をたくさん付ける。糸を垂らしたような様子から、別名糸桜とも呼ばれる。真間山の伏姫桜など有名だが柔らかく垂れ下がった枝は、繊細で細く折れそうだが、揺れることで、枝に遊びをもたせ、風雪にも耐えているのだ。

花冷や白紙で届くファクシミリ 坂本 徹

インターネットが普及した現在、ファックスは余り使われなくなつた。データを紙ベースでなく通信されることにより、より確実さが増したからだろう。しかし、まだ機械音痴のアナログ族にとっては、ファックスの方が信頼性があるのかも知れない。

い。ファックスの使い始めの頃は、よく裏面のまま送って相手に白紙が送られこともあつた。白紙で届いた時は、相手が誰だか、何の用で送つて来たのかをいろいろ思い巡らしてみた。

冴返る手に火起こしの風囀ひ 吉武 美子

どんな場面での火起こしであろうか。いずれにせよ野外の作業で火を熾さなければならなかったのだろう。暖かい日がしばらく続いた後だけに、余計に身の引き締まる感じがする。冷たい風が吹き寄せ中々火が付きにくいのが、ちよつと手で囲んだだけで、火がほのぼのとついた。火を熾すという動作を細かく描写したことで、冴え返る感じが一層伝わった。

白湯のごと沁みるひと言あたたかし 小林 陽子

朝一番に飲む、白湯が健康に良いと言われている。いったん沸騰させた湯をぬるく冷ますことで、カルキなどの不純物がとび、口当たりも柔らかくなる。お茶やコーヒーなどの刺戟物がないので体に染み入っていく気がする。声をかけられたひと言も何の刺戟のない白湯のように心に沁みるものであつた。

鳥帰る眼に海光の痛きほど 田川美根子

作者の田川さんは長崎の方で、長崎の風景をこの句に重ね合わせるより理解が深まる。長崎は多くが海に囲まれ美しい所である。渡り鳥たちは遠い北国に帰って行く。鳥たちにはたぶん必死の旅であるはずだ。これを静かに海辺から見送つた。飛んでゆく鳥たちを眺めてその自由さを羨しく思いつつ海光が痛いほど眩しかった。

〈以下略〉